

若木やはたち花。兩吟一日千句に「長頼ひや
養老の浦、みんつりと叶はぬ戀が叶ひきて、
搦屋のたごちまる長著」わかみんつり」
を見よ。

む

むいろうじゆ

色香すぐれて咲きたる
は無愛樹といふ木にて、文字には
憂無しと書く(釋迦)

〔無愛樹〕梵語 阿輸迦 *Asoka* の譯名。釋尊
はこの樹下に生れたのである。佛經語卷
九に「阿叔迦樹、應云阿輸迦、譯曰無愛」、
因果經に「二月八日夫人摩耶往生靈胎、
見無憂華、舉右手摘、從右脇出」。

むいかたれ

六日だれの忌明けの誕生
日の食初のと、取つて取つて取上
婆同前(續藏天皇)

〔六日垂〕むいかたれはむゆかしの轉。鑑室自語
六に「産婦の七夜の六日めを六日たれといふ
は、出生の小兒のうぶかみを六日めに剃りし
よりのことなるべし、髪をそるといふを忌みて
髪垂といへりしより、六日髪垂を略して六
日垂と稱せしなり」著信錄に、出産六日に初
めて名を呼ぶ、六日だれといふ、平産の披露
に知音の方に餅を配る、男子は三つ、女子は
二つなる由入てある。

むいさき

短氣の犬死、無意氣に事を
仕損ぜしといはれうが腹が立つ
(持統天皇) あまり無意氣な御勘當、
つらい親御の心や(持統天皇) どう

でもかうでも吾妻殿を奥へ連れて
と引立する、どれに下地の無意氣
力(壽門松)

むかしこよみ

万年曆昔曆新曆、當
年未の初曆(大經師)

〔昔曆〕宣明曆をいふのである。宣明曆は貞觀
三年より貞享元年まで久しい間行はれてゐた
曆である。この曆法は一年を三百六十五日
二分四十分とするが故に、貞享元年に至つて
は四分分つてくるので、貞享元年に經過すべ
るの曆に起つて、明の大統曆を採用すること
となつた。然しこの大統曆も暫くの間で廢
止となり、貞享元年十一月の末頃から保井春
海の作つた貞享曆を用ゐることになつた。こ
こに昔曆といふのは、おきん、茂兵衛の茲通
事件が天和三年八月の出来事であるからで
ある。また新曆の語を用ゐるのは、この作ら
し上流が新曆を用ゐてゐる時であるからである。
序云、この茲通事件を近松が本文中に、
「貞享元年甲子の十一月朔日來る丑の初曆」
と書いたのは、時日を間違へた筆の誤と見ね
ばならぬ。若し近松が貞享元年甲子の出来事
と思込んでゐたものとすれば、昔曆は大統曆
をさすものと見るか、或は單に曆の名を重ね
た文飾と見ねばならぬ。

むかはき

鍔細き鹿子斑、御行膝の
料なるべし(倉橋山)

〔行膝〕向腰中の義。昔時騎馬に用ゐるもので、
獸皮で作り、腰に纏うて袴の前面を垂れ縮ぶ
もの。

むかひおに

煙草賣の源七はまた見
えぬか、氣さく者の通り者、今に
も來たらお姫様まじくらに迎鬼し

て遊ばまいか(龜山遊)

むくらんぢ

むくらんぢの直垂・波
に千鳥の大口(千載集)

〔むくらんぢ〕木蘭地の轉訛。その條を見よ。
*むくらんぢ 比翼の羽子板むくらんぢ
も、研き入りては色に成る(壽門松)

むぎあき

晩かあすかの里も賑ふ麥
秋の、麥搗歌の鳴揃(持統天皇)

〔麥秋〕舊曆四月をいふ。禮記・月令篇に「孟夏
之月……靡草死麥秋至」とありて、註に「秋
は百穀成熟の期、これ時に於ては夏なりと雖
も、麥に於ては即ち秋なり、故に麥秋といふ」。
下學集・時節門に「麥秋月」。

むくつけし

足には髭のむくつけ
き、馬の足かと疑はる(虎が鷹) あ
のむくつけな野暮でんめにそもや
一夜も添はれうか(兼好)

〔むくつけし〕むくつかしなどと同じ縁の語であ
る。氣味の悪い意にいふ。源氏物語若紫の卷
に「我若はいとむくつけうかにするならん
とふるはれ給へん」。同浮舟の卷に「あなむ
くつけや、こは天山はいとおそろしかなる山
ぞかし」。

むくらんぢ

むくらんぢの直垂・波
に千鳥の大口(千載集)

〔むくらんぢ〕木蘭地の轉訛。その條を見よ。
*むくらんぢ 比翼の羽子板むくらんぢ
も、研き入りては色に成る(壽門松)

むくらら

これは寝る間もあら憎
むくらら

〔無患子〕萬木で、葉は羽狀複葉をなし、實は
黒色で固く圓く、これを羽子につけなす。無
患子の黒き實も研き入りては艶が出るやう
に、禿も研かれては太夫の艶色にもなるよ
の意。

くや憎くや憎くやと、むくる腹む
くむくおきに(用明天皇)

むげ

お薬まで下されし志をむ
げにす(卯月調色) 向後房とは通
路せぬ、今まで心をむげあり、(重
井簡) あめ月天子の照覽あり、利
生は無下にばよくなるまい(大經師)

むげなうせ

むげなうせくでは無けれど(重井
簡) 人に心を盡させ、むげない心
が一つの疵(菅原甲)

むげん

地獄の火焰に輔かけ、無間
の底の鐵床にのせられ(永朝日) 大
紅蓮の水を汲み、無間の薪を煮り
運ぶ(釋迦) 佐夜の中の山無間の鐘撞
當て(福福長者(博多) 君に逢ふ夜
は天の戸の、あくるを恨み語らひ
し、今はむげんの釜の蓋、あくるを
待つに甲斐も無く(井筒) 婆婆で手
馴れし玉がわざ、無間の釜で茶を
わかし(大經師)

〔無間〕梵語 阿鼻 *Avici* の譯語。八大地獄
中の第八なる最重苦處であつて、この獄に墮
ちた者は阿鼻苦痛を受けること間斷なきを以
ての故にこの名がある。無間の鐘は、遠州小
夜中山觀音寺にあつたよきよの中山で見ると
俗説に、古來この鐘を撞くときは現世長者
となれども、未來は無間地獄に墮すと云ふ。

桂公實(寶曆年間)撰、秋齋閑語、卷四に「無間の鐘の事。平生米を不食て飯をひるの如くに、おそれ飽食をたべ、其心を以て随分しまつて、儉約すれば、間なく富といふに成るとの事よし云云。無間の鐘といふもの實際有らざる、博多小女郎波流、長者經の文中にも、「無間の鐘とは名ばかりにてし見え、一九の腰栗手にも、「この寺に無間の鐘をつきなぐし、今は暗日にならそつてやらん」と見えたる。無間の釜」とは無間焦熱地獄の釜をいふ。

*むさい やい、駕籠舁め、むさい、姿で侍に抱付く慮外者めと分霧、今朝の遺恨に胎内の悴を殺さうのむさい心底(百日曾我)

穢穢の意にしへり、むつかしといふに意通へり、つか反た也、たさ約通す。

むさいがき 我長者の萬燈は未來の糧に盡果て、來世は極貧無財餓鬼(釋迦)

「無財餓鬼」食ふに食無き餓鬼をいふ、うらぎさの條を見よ。

むざう 今で思へばむざうらしげに、そがいにせでも大事なかつた(博多) 縁あればこそ抱いて寝て、むざうか者とも思しやつてたりめす(女護島) むざうか者とりによぎやアつてくれめせ(女護島)

「むざん」(無厭)の轉、不便、憐れむべきこと。かばゆらしこと。西川忠英撰、町人袋草保四年刊、卷三に「むざう。不便なるをいふ、無厭なるべし、宇治拾遺物語にも見えたり。この語現今九州地方で用ひてゐる。鹿兒島地方で「むせ」といふ、無厭の約轉である。「むざう」に「か」を添加して「むざうか」といふよ。

*むざうらさう 阿羅羅仙人の弟子となり、無想有想を學ばせ給ふ(釋迦)

「無想有想」吾人が五官で感知する所のものに心を寄せ、氣を奪はれるを有想といふ。一切萬物の形體乃至善惡正邪等總ての差別を想ふこととなく、本來空なるを悟つて吾心空となるを無想といふ。

むささび 谷の鼻閑子鳥、梢を渡る颯風や(蟬丸)

「颯風」深山の樹木のうつろに棲み、夜間出でて果實を食ふ、その形颯風より大にして前後兩肢間に膜がある、能く樹上を飛行す。その聲は小兒の泣聲のやとである。

むささんしん 二乗作佛の鶯け無作三身の谷に嘯り(百日曾我)

「無作三身」三身とは法身、報身、應身をいふ。天台圓教の佛は三身共に本有自爾の性佛にして、因行の造作にあらざればいふ。

*むさしあぶみ 春の心を問へばいふ、問はれば恨む武藏鏡、かかる姿もあるものか(吉野忠信)

「武藏鏡」在時武藏には高麗人を多く置かれたれば、それ等の人の作つた高麗様の鏡を武藏鏡と云うて、後世までも産出した名物である。問へばいふ問はねば恨む武藏鏡を見よ。

むさしの 君が歪いづも飲みたや武藏野の、月の夜の夜すが戯れ遊べ(女護) ながい刀なさをさそさかつき奴の奴の、奴がうけし武藏野の、草花盡し青丹よし(百日曾我)

「武藏野」武藏野は「野見蓋せしめ」を飲み盡せぬ」にきかせて大蓋の名としたものである。この大蓋の繪は時時翁撰、錦繪草子、卷之二に載せられ、内面に月と草蓋の畫が書いてある。

井原西鶴撰、雜留卷之二に「青上白ののみつくさぬ」と名を付けし武藏野といふ大蓋は無藝野也、言野見不盡之意也。「君が歪いづも飲みたや云云」は當時の流行唄に據つたものである。その條を見よ。

*むさと 心易い朋友なれども、申しにくいが味な氣質で、むさと物の言はれぬ仁(龜籠三) このやうに落馬の流行時、むさと言分などなるるな、首が落馬致さうぞ(龜籠三)

漫なる事云ふかといふ、昔の詞には無左右といへり、左をも右をも思ひ置る事などみだりなるを云ふなり、今は無の字を音に唱へて、無左右と云ふをムサトといふなり。又無左右といふを俗に誤りてムシヤウとも云ふ。「むさ」の「む」が鼻にかかる音なるによつて「むさ」が通つて「むざ」といふ。

*むさぼりつく さあしてやつたぬかるなと、ばらばらと立懸り、半兵衛小辨にむさぼりつき(生玉) むさぼりつきを取つて突退け(女護島)

「食附」むさぼり附く。この語説つて「むさぼりつき」むしやぶりつきともいふ。

*むざん 無念涙を抑包み一禮いうて立出づる、心の内にこそ無慚なれ(加増曾我) 身を顔はして歎きは、心底道理にむざんなり(今宮)

「無慚」罪を作りて心に慚ぢる所なき義。釋じて「無慚」に「むざん」なり(その條)といふ。俱舎論四に「於三所造罪自觀無恥、名曰無慚」。

*むし この聲耳に入る時は、百八煩惱、むしの罪障を消滅す(用明天皇)

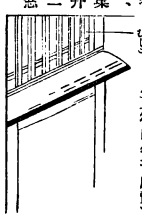
あさましや友風、無始の煩惱は雪を削る(賀古廻つて探究してもその始源なきこと)「無始の罪障」は無始以來の罪障のこと。「無始の煩惱は無始以來の煩惱のこと。」

*むしこ むしこより手を出し軒に立てる鈴おつ取り(堀川波渡) むしこをばづし帯結び下げ、傳うて下りん其用意(卯月紅葉)

「蟲籠」蟲籠の略、蟲籠のやうな組格子なるによつていふ。大屋根と小屋根との間に造れる格子窓をいふ。

「居處の部に、寛文七年に集めたる續山井に、蝨の巢や二階階の蟲籠窓(道)とあるは、細かに子を打たる怒なるべし、今も怒の出格子を蟲籠と呼ぶものあり。

*むじやう 今夜はしよさいの無常風、沙汰はないこと、葬禮の戻り、ちよつと寄りたし心は急く(女腹切) 彼の蚊屋を生絹の衣にして着たい、只無常氣でをかしようない(歌念佛) 岡麿卒三魂を縛して關樹下に鳥る、二鳥棲んで掌る、一賀古教僧(無常)一切萬物の生滅變遷して常住でないことをいふ。死も無常の一である。「無常風」とは、死を誘ふはかな風、長町女腹切のこと文は、所在無しの死の風が吹いて、死者の葬禮に行つた戻りだから、遊女屋に立寄るのは隱密のことの意。



「無常氣」とは、この世をはかなみて厭世の念の起ること。
「無常鳥」とは、冥土に棲める鳥の名、不如歸をいふのだといふ。「關原卒三魂を縛して云々」を見よ。

むしやうにん 韋提希夫人の無生忍にあやかり給へ(百日曾我)
〔無生忍〕不生不滅の理を覺知し安忍して心を動かしぬをいふ。

むしやはしり 射手船には一枚楫つき立てつき立て、武者走を高く上げ船棧を二行に列ね(百合老)
〔武者走〕軍船の船櫓より少し下りて、廣さ三尺許の板棧で、船梁の横木に根木を渡して張り、舳から舳までの通路にしたもの。

***むしやぶりとく** 馬方の子は持たぬと、もぎばなせばむしやぶりとく(丹波與作)
「むさばりとく」を見よ。

むしやらごゑ 海老腰ヤアえいと立あがり、涙に濁るむしやら(関八州)
噓せ進む聲の轉訛であらう噓び泣きする聲。

***むしやわらぢ** 十王頭の筋金入れたる脚半、揉單皮、武者草鞋(弘徽殿) 戰場出陣の折ならで召しも習はぬ武者草鞋(堀山筈)

むす こちば八貫出して置く、負けければそれで取遣りなし、勝てばむして十六貫何で済す合點ぢや(丹波與作)

〔蒸〕蒸返すの略。蒸すことの繰返されるをいふ。

ふら倍にふえる。むすは神代記に「産」をよんである。蒸といふも生産の義。

むすび 日本では相撲取りをむすびと申すげな(國性爺)
〔結〕組み合ふを結ぶといひ、また相撲にて開脇の次に小結といふもあれば、相撲取りを結びといふた滑溜の語である。

むすぼる そも一睡の假枕、皆一心のむすぼられ夢を結びてあり磯海(薩摩歌)
新撰浮城に「結」を結びむすぼるとよんである。纏じて、心懸結するをいふ。

むそく 死目に逢はでは今までのお情もむそくして、お恨み申すも物體なし(本領曾我) 主をばこくむ下人の心むそくになして太夫狂ひ、ええ曲もない時致殿(扇八景)

貧者の一燈、萬燈もしんどう思へばむそくする(聖徳太子) いやいや御邊を島に残しては、小松殿。能登殿の御情もむそくし、御意を背く越度(女禮屋)

〔無忌〕武士の無難なことをいひ、纏じて、無効。むだ。日本永代蔵(貞享五年刊)巻六、身體かたまる深川のらるしの條に「或時石清水八幡宮を申しおしてあんごうのとうを執り行はれ、目出度きこと山山なりしに、この行事はその亭主の心持大事なり、萬の義ををしきと思へば忽ちむそくする事なりしに、此家破滅の御告にや、大釜の下より大束の藁燃えしきりに、あまたの人庭にありながらこれをさしくべる人もなくて、あるじ心に懸けしより幾程なく此家絶えて、其名は誦歌に残れり。

〔無忌〕武士の無難なことをいひ、纏じて、無効。むだ。日本永代蔵(貞享五年刊)巻六、身體かたまる深川のらるしの條に「或時石清水八幡宮を申しおしてあんごうのとうを執り行はれ、目出度きこと山山なりしに、この行事はその亭主の心持大事なり、萬の義ををしきと思へば忽ちむそくする事なりしに、此家破滅の御告にや、大釜の下より大束の藁燃えしきりに、あまたの人庭にありながらこれをさしくべる人もなくて、あるじ心に懸けしより幾程なく此家絶えて、其名は誦歌に残れり。

***むつがる** 今はこの野のこの草に、養はれぬる身となるは、宿世いかなる報ぞと、ややむつがらせ給ふにぞ(十二段) お袋様も殿様もたらしつ此つ遊ばせども、どうでもいやぢやとおむつがり(丹波與作)

日本紀に「積」をよんである。小兒のじれて泣くをいふ。新編女重寶記(元祿十五年刊)に「泣くをむつがる」を見よ。

***六の巻** 數は六つの巻の聲に(天鼓) 西にぞ壬生の地藏堂、六つの巻を導きて、慈悲を知邊の錫杖も(尋常)

六道に行く分け道をいふ。六道はその條を見よ。天鼓のここの文に就ては「夜遊の舞樂の時去つて云々」を見よ。

六の法 凡そ繪の道には六つの法あり(反魂香) 繪の道に氣韻生動、骨法用筆、應物寫形、隨類傳影、經緯位置、傳移寫、以上六法ある。

むつむさし 七つ道具に六つむさし辨慶はおさへの役(冷泉節)

〔六六指〕一種の遊戯の名。九條の線を盤上に劃し、六個の駒を各三個ずつ持ち、線をつたどり早く定めぬ點に至つて相連れたるを勝とする。嬉遊笑覽に「安齋羅羅に……、江戸にては十六ムサンと云、相州鎌倉の邊にては二ツサと云ふ、二人にて三つつ石を六つ持つれば、二三とふ心か。好色一代女、卷三、町人腰元の條に「入口なる白黒の玉を指ひて、小供相手に六つむさし、氣を盡す事にもなりぬ。源氏冷泉節のこの文は、辨慶の七つ道具をきかせて、六指に武藏功の武藏をいひかけたのである。

〔六六指〕一種の遊戯の名。九條の線を盤上に劃し、六個の駒を各三個ずつ持ち、線をつたどり早く定めぬ點に至つて相連れたるを勝とする。嬉遊笑覽に「安齋羅羅に……、江戸にては十六ムサンと云、相州鎌倉の邊にては二ツサと云ふ、二人にて三つつ石を六つ持つれば、二三とふ心か。好色一代女、卷三、町人腰元の條に「入口なる白黒の玉を指ひて、小供相手に六つむさし、氣を盡す事にもなりぬ。源氏冷泉節のこの文は、辨慶の七つ道具をきかせて、六指に武藏功の武藏をいひかけたのである。

***むないた** 繼信が着たりける鎧の胸板・押付・總角(凱陣八息)

〔胸板〕鎧の胸の所をいふ。鬼(むな)また一の板ともいふ。

***むながい** (最明寺歌) 〔舞〕むながき(胸懸の音便。馬の胸より鞍に懸ける組舞をいふ)。

***むながひ** 門の前に兩三人、どつこい捕つた、胸がひ撰んでれぢす(ゆる) (女禮)

〔胸交〕衣袴の胸先で交る所。「むながひ」の「がひ」は「したがひ」の「がひ」と同じく、即ち「交」である。

***むなぐら** 胸ぐら取つて引いて行く(二枚筒) 胸ぐら掴み宙に引つ提げ(重舟筒)

〔胸座〕座はすべて物置處をいふ。胸座は胸元、着るある衣服の胸のあたりをいふ。

むなづはらし 梅川いとどむなづはらしく、ああ我らば旅の者(冥途飛脚)

〔むなづはらし〕(語終らし)の約訛。胸おしせまるやうである。今様二十四孝(寶永六年刊)巻之五に「母人の袂にかへてもふびん深く愛し給ふ三毛を殺させては、今昔より物思し給ふを見ぬ内にむなづはらしになりて、色に託るに魚屋合點せず云云。

***むねと** 宗徒の御味方八十の真人 武智の郡司(用明天皇)

*むねもん (用明天皇)

「棟門」家屋雜者に「も」と棟門に對して、樓なくして常の屋の棟の如く作れる門をいふなり」と見えてゐる。

*むねわけ 嵯峨野の草になつむ駒、鞭をくれたる胸分の、尾花かき分け走り来る(松風)

「胸分」おなわけともいひ、獸類が草を胸で分けること。萬葉集、卷二十一、大伴家持の歌に「さきを鹿の胸分け行かん秋の萩原」

むのじ 手管の上手め見たぞやらぬぞ、チナイや悪口いふは誰ぞいの、問はれて言ふはむのじながら虎でござんす(會稽山)

「無之字」無念の首首を取つて隱語的に言ふ廓詞であつて、文字詞(はもじ)の條を見よの類である。ほれる(「徳をほの字」とも)るもこの類である。異林子のこの文は、問はれないうちに此方から名乗らうと思つたに、問はれて言ふは先を取られて無念ながら虎でござんすとの意。

むのじ 車に乗ると見えつるが、無の字の筆畫ありありと、無間の底に沈むべき(女護島)

むはろなんしのだいのり、むはろなんしの大用を起し、有相修因より直に無相の樂果に入る(大原問答)

「無之字」無間(むげん)を見よの無の字。「無方」佛思の大用(佛菩薩は種種の方法を以て給ひて思議し難く、臨機應變能く衆生を攝取遊化し給ふ力用動作をいふ。大原問答のこのあたりの文は、大原談義問答抄に據つたもので、この文も、「於三圓極無相無念果成之上、起無方佛思之大用、自自有相修因、直入無相樂果、抑在生見、令一體達無生理云云」と見えてゐる。

むへんぎやうばさつ 元よりも月光君無邊行菩薩の再來ゆゑ自解佛乘の悟を開き(大覺)

「無邊行菩薩」本化の四菩薩(上行、無邊行淨行、安立行)の二で、日女御前御返事などの中にも見えてゐる菩薩である。

*むほん 別して御合見頼朝公御謀叛思召し立ち給ふ(つき)十二段

「謀叛」背いて兵を擧げること。左傳、文公十四年の條に「王叛王孫蘇」に見え、太平記に「天皇御謀叛」「新田義貞謀叛事」など見えたり。謀叛は下のうにむくとばかり定められない。又謀反と謀叛とは別義であつて、大覺律令に、謀叛は八箇中の第一で、謀叛は八箇中の第三である。律疏疏釋に、「八箇中一日謀反(謂謀危國家)とありて註に、「謂臣下將圖逆節、而有無君之心、不敢指斥尊號、故託云國家」と見え、また同書に、「三日謀叛(謂謀背國從他國)とありて註に、「謂有人謀背本朝、將投他國、或欲圖他國、或欲以地外奔」と見え。

むまざくり 松が根高き馬ざくり、陸蹴りやら轉ぶがや(虎が磨) 喜三太は旅疲れ、むまざくり足ふん込みただよふ所を(藤静)

馬小別の義。馬の脚塵の掘れ落ちるもの。夫木集、二十七、宿賀の歌に、「歌ならぬ身に知られたる馬ざくり、さのみや同じあとを踏むらん」。

むめ 「うめ」を見よ。

むやくしい なうお袋、姑に酌とらせむやくしいかば知らねども、かう召さつたがよい筈(萬年草) むやくし顔の色色を見て取りながら、半兵衛立つも立たれず仔細は知ら

す(菅庚申)

「無益しい」の義。爲ないで済むものを爲ねばならない。餘計な。つまらない。はからしい。好色一代男、卷二、髪きりても捨られぬ世の條に、「萬手代にまますれば、いつとなく我になつて様といふ尻聲もなく、大方は機嫌とりてむやくしい事も程さう」

*むらさき むらさきの大幕うたせ(出世世清) むらさきの旗(駐合懸)

「むらさき」(養瀬)の延びた語。染色のむらむらに濃きこと。

紫の雲 罪も消えつつ紫の雲のうたせ(花娘)

吉祥のある時にたなびく雲の色であるといふ。往生要集卷五に、「二十五の菩薩百十の比丘衆諸共に來り給ふや、西の空紫雲たなびきて見え、山家集に、「西を待つ心に藤をかけたこそ、その紫の雲と思はれし見えてゐる。左佐木先陣に、「紫にむらむら紫の雲をきせな雲山中山寺のある山をいらたのである。うちちゅうざんじ」を見よ。

*むらさきはうし 紫帽子川水に映れ紫ばうし(丹波與作)

「紫帽子」紫縮緬で左右に垂れた帽子で、びらびらと翻るが故にびらり帽子(その條を見よ)ともいふ。もと歌舞伎役者(野郎)の被る帽子であつたが、おもに町人の婦女が笠の下に被るものとなつた。役者全書下に、「紫帽子。歌舞伎にて用ゆ、紫帽子はそのかみ鳥居庄七といふ女形は、是びらりしてきてせたるよし云々。西鶴俗つれ巻二、作り七賢は竹の一よにみだれの條に、「川舟にむらさきのばうしかけたる野良あまた乗りて、大和屋座のはやしかたも大かた二階にあが

り「やうらうらうし」を見よ。丹波與作のこの文は「そなた節田の云々」を見よ。

*むらしげとう 鼓をばつせし村重(女備)

「村重」藤をむらむらにしげく巻いて作つた弓。貞丈雜記、卷十に、「村重藤の事。弓禮祿傳書に云く、村重藤と云ふは藤をむらむらとちりつてつひたるを云ふなり、これは重藤の根本とする所、二十八三十六合せて八八六十四のつもりに巻くにより、其餘のこしらへ弓はすべてむら重藤と云ふなり、しかれども中頃より村重藤のむら云を定めても巻きたるなり、口傳可有之云々」

*むりやう むりやうの縞子が十二丸(博多) 被く布圍の縞子よりむりやうの事ぞ思はるる(露門松)

「五絲縞」支那運來の縞子をいふ。和漢三才圖會、卷二十七、縞布類に、「六絲縞、俗云無里也字、按六絲縞出於廣東、南京、福建、似八絲縞、而絲擘故者、其光滑亦稍劣、比二於縞縞子、則厚軟也、其縞端有「漢府八絲之四字」書、不知漢府何國之府名乎、むりやうの事ぞ思はるる」とあるは、五絲縞に無量をいひかけたのである。

むりやうごふ 臨終の一念無量劫を引くといふ(生玉)

「無量劫」永遠の意。劫」はその條を見よ。臨終の一念云云」を見よ。

*むろ せれ無漏無生の法界には自他の念更に無し(彌九) 轟く穢土は假の宿、有漏路無漏路の中休み(卯月調色)

「無福無生の無生とは、現象論の立場から視れば萬有は生滅無常のものなれども、本體論より視れば本來無生無滅のものであるによつていふ。

*むろ 吹雪にまじる勤行の鈴の聲をしるべにて室の戸に案内すれば(井筒)

*むろ 焼物はむろの酢煎(番庚申)傾城といふものにたまし賣られ、室の津の室君と言はれし(用明天皇)

*むろ まちもやう 小袖の縫は將軍の御物好、俗にいふ室町模様(女夫池)「室町模様」金銀繡を以て服装を飾り、その模様派手であつて、室町時代上流間に流行したばさら風なるをいふ。

め

*めいしよく 池田の宿の俵屋の長が家の名色熊野は京より戻りしとて(本領會談)

*めいどのとり やまや待てなれよ

むろ—めうらくだいし

冥土の鳥ならば、死出の山路に關据みて(會橋出)げに時鳥は冥途の鳥、しでの田長を啼くとかや(小栗判官)

*めいもの 地名部沼津を見よ。

*めいめいてう 一體に二つの頭、餌を争ひ食ひあふ有様、命々鳥の類かや(女夫池) 赤檀箱の水風呂桶、めいめい鳥の雛、孔子の自筆の論語・大學(大藏冠)

「命命鳥」一身二頭の鳥の名。延寶版・節用集、雜記、者婆鳥の註には「法華には云三命々阿彌陀經雜寶藏經等には云三命、一身二頭鳥也、者婆梵語也」と和漢三才圖會・卷四十四、山鹿類下、「命命鳥。雜寶藏經云、昔雪山中有三命鳥、一身二頭、一頭常食菓果、欲使身得安穩、二頭便生嫉妬之心、而作是言、彼常云、何食好菓果、我不得、即取一菓果、食之、便二頭俱死、云々」とありて、命命鳥の畫が載せてある。武澤傳來記(貞享四年刊)卷八、惜しや前髪箱根山風の條に、「いつの程にか色ある兄弟の契約、不斷妹背の如く寝て二子山にならば、愚かに命命鳥の宿木に夜を籠め」。

めいもん 鹿毛の駒に縛り乗せ、命門の筋を切つて心の臓をつんざき、刺殺して棄て候へば(佐佐木)浮中沈の三候も心肝腎も命門も、右にあるやら左や(谷風節)

「命門」漢方の語。背骨正中線の内第三腰椎の棘状突起の下にあつて、ま九男にありては右腎をいひ、女にありては左腎をいふとある。新刊勿羅子俗解八十一難經(元和十三年古活字版)に「萬物所生必有其原、夫人生氣之原者腎間動氣是也、腎之動脈在足內踝骨上動脈陷中、名曰太谿、穴是足少陰腎之經也、女子以三左腎爲三命門、男子以三右腎爲三命門、主生死之要、故謂三命門脈、此係生氣之原、藏府經絡之根本、通三呼吸之門、作三焦之神藥(寶永二年刊)卷一、風流の目利の條に、「朝顔の花のうきを見ては、命門の脈をうかがひ、鳥鳴のうきを聞らば」となりのお要をあらはれむ。



*めいよ たつた今但馬の湯入を乗せて通る駕籠昇がめいよな事を言ひました(大經師) お山は口へも寄せなんだが、めいよな、鰻といふものは食へば食ふ程お山が食ひたうなつてくる(水朝日) 青梅好きやらば悪阻でござる、めいよな不思議や中戸のこれごとが、はや七月とぞ答へける(百日曾我) 三塔に隠れなき長刀の達者と、價正坊に授かりし打物のめいよと、甲乙分目

の戦は、巢立の鶯の若鳥と、深山を出でし荒熊が、野邊に争ふ如くにて(孕常盤) 奇怪。不思議。按じると「めうらく」は名譽である。ほまれ。戦より轉じて、奇妙か。はつたこと、奇怪。不思議の當に「めうらく」は「めうらく」めうらく。西鶴撰「諸國咄」(名大)卷一、大晦日は合はぬ算用の條に、「小判もまづ御仕舞ひ候へと集むるに、拾兩ありし内一兩足らず、座中居直り袖なふふるひ、前後を見れば、懸へんにきままりける、主人の申されし、その内一兩はさる方へ拂ひしに、拙者の覚え違ひといふ、ただ今までたしか拾兩見えしにめいよの事ぞかし、項角は面面の身端と上座から帯を解けば、伊賀越道中双六(稱徳)伏見の段に「何と畫の洗ひ薬でさつぱりとよからうが、イヤさしてかはつた事も、ハテめんよな、アノ薬でよら薬ぢやが「めんよ」を面天または面妖など書くは當字である。

めうかくきやう 等覺深位の時鳥はめうかくきやうの峰に鳴き(百日曾我)

*めいん 一字一字に佛の妙諦そなへたり(三世相)

めうらくだいし 妙樂大師の御釋に、諸經所讀多在彌陀緣深厚故と述へ給ふ(百日曾我) 「妙樂大師」天台宗第六祖湛然をいふ、支那常州妙樂寺に在任してゐたので妙樂大師といふ、また普陀山に在りての飛樂大師といふ、摩訶止觀輔行など撰述頗る多し、唐・興元元年十二月寂す、壽七十一。